

東南アジア海域世界と農業フロンティアの拡大

——インドネシア南スラウェシ州の事例から——

田 中 耕 司*

The Southeast Asian Maritime World and the Expansion of the Agricultural Frontier ——A Case from South Sulawesi in Indonesia——

Koji TANAKA*

The term “maritime world,” which is specifically used in the field of history, may appear to have little connection with such subjects as “agriculture” and “peasant.” However, when we focus on the characteristics of lifestyles in the Southeast Asian maritime world and reconsider the characteristics of peasants in the region in this light, we arrive at a different view from the conventional concepts of agriculture and peasants in the Southeast Asian archipelago.

Based on research findings on the activities of spontaneous migrants settled in frontier areas in Kabupaten Luwu in South Sulawesi, Indonesia, this article discusses peasants and agriculture in the light of such characteristics as “mobility,” “commercial orientation,” and “good networking” which are common to people living in the Southeast Asian maritime world. The finding that not only Bugis migrants, who are famous for their sea-faring and mobility, but also Javanese peasants migrating to frontier regions from the “agricultural-based” world showed similar “maritime” characteristics suggests that such characteristics provide a useful tool to reconsider the concept of agriculture and peasants in the Southeast Asian archipelago. It is also suggested that such reconsideration may be beneficial in approaching and solving the problems pertaining to the relationship between people and resources in the archipelago.

はじめに

「海域世界」というテーマをめぐって、これまで「農業」「農村」「農民」がそれに関連する問題としてとりあげられたことはほとんどなかったように思われる。東南アジア海域世界で扱われた商品は、古来、南海物産や森林物産で、その多くが自然資源の採集に依存する産物であったからである。ヨーロッパ勢力が東南アジア海域世界に参入してから扱う商品も長らく同様なものであったが、19世紀以降のプランテーション農業の進展にともなって、農業生産物が海域世界の主要商品として登場することになった。しかし、この時代以降も、海域世界という枠組みのなかでこれらの問題がとりあげられることはなく、もっぱら植民地経済下での農村社会

* 京都大学東南アジア研究センター；The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

や農村経済の変容などが主要な関心事であった。プランテーション作物がおもに生産された地域も、住民の生活を支える食用作物がおもに栽培された地域も、そしてその両者がともに生産された地域も、すべて農耕地と集落がひろがる「農村」として、そしてそれを担う人たちは「農民」として先験的に一括されてきたように思われる。

東南アジア島嶼部の農業や農村、農民を、上記のようなとらえ方とは異なった視点から検討しようとするのがこの小論の目的である。そのために、「海域世界」という歴史学の分野で一般に使われた用語をキーワードないしは枠組みとして設定し、その中から東南アジア島嶼部の農業、農村、農民の性格をとらえてみようというわけである。ここでは、インドネシア南スラウェシ州への農民移住、すなわち彼らの移住、開拓、定着の過程を事例としてとりあげるが、これが開拓前線における特殊な事例ではなく、すでに安定したかに見える農業地域の農村や、そこに住む農民のもつ東南アジア的とも言える特性を再考する契機を含むという点を、この小論で明らかにできればと思う。

I 枠組みとしての海域世界

東南アジアを大陸部と島嶼部に区分することは地理学的にも地政学的にもそれほど困難ではない。比較的明確な範囲を設定しうるようである。例えば島嶼部は、現在の東南アジア諸国のうち、大陸部に位置する国を除いた、マレーシア、シンガポール、インドネシア、ブルネイ、フィリピンなどからなる地域と言うこともできるし、ほんの少し範囲を広げて、半島部のタイを含むマレー半島とその東と南に広がる島々を含む地域として明示することもできる。

一方、東南アジアの海域世界が地理的にどの範囲なのかと問われると、その答えはそう簡単ではない。海域世界という言葉が、「交易の時代」と呼ばれたある特定の歴史時代に関連して使われる場合に想定される広がりとは、この世界がもつ海洋性を強調して使われる場合に想定される広がりとは、おのずとその範囲は異なってくるはずである。また、海域世界が扱った交易品を産出する森や海、そしてその中継点が位置する海岸、河口、川筋の合流点などのうち、海を海域世界の中に入れるのは当然としても、森はどうなのか、また川筋の上流地域はどうなのかという問題が頭をもたげてくるに違いない。海域世界を画定するための何らかの基準あるいは性格づけが必要になってこよう。

この問題に関連して、前田 [n.d.] は、次のような海域世界像を提案している。それによると、東南アジアの海域世界を、たんに東南アジア島嶼部と同じ地域とはせず、その外延はさらに東にも北にも西にも広がって、アジア大陸東南の熱帯、亜熱帯の沿岸、大河下流域もその一部として含む、広大な海と熱帯林の地域として画定している。そして、その世界における生活空間のプロトタイプは森と水（海と河）の漸移帯であり、その世界の主人公は漸移帯で機に

応じて狩猟、採集、漁、農、交易を行い、森と水のフロンティアに向けて生活空間を広げていった人たちで、彼らの社会は離散移住、商品化、ネットワーク性という三つの特性をもって形成されてきたとする。

ここで海域世界の範囲として強調されているのは、自然基盤としての森と海に加えて、その漸移帯において拡大してきた生活空間もその主要な構成要素としてとりあげていることである。では、その漸移帯で拡大した生活空間とは何か。前田〔同上〕は、それを「海（laut）と陸（darat）をつなぐ空間、即ち川筋（rantau）であり、河口（kuala）であり、濱海（pesisir）であり、舟の廻る終点（pangkalan）」であるとして、その特徴を「農業空間から見れば一種のフロンティアであり、異質なものが出会う所」と説明している。この説明によると、海域世界と農業空間が出会うところもまた海域世界であるが、農業空間そのものは海域世界とは別の世界として意識されているようである。しかし、前段の海域世界のプロトタイプについての説明によると、フロンティアに向けて広げられた生活空間、それが例えば農業空間であるとすれば、それもまた海域世界に含みうることを暗に示唆しているようにも受け取れる。こうした、いわばグレーゾーンの地域がその提案の中にあることを確認したうえで、私は、あえて後者を強調する立場、すなわち農業空間もまた海域世界に含まれるという立場から、東南アジア島嶼部の農業や農村、農民の特徴を考えることにしたい。

現在、農業空間は人々の生活空間として、森や海のそれをはるかにしのぐ面的な広がりをもつに至っている。そしてその傾向は今後もますます拡大していくに違いない。環境保護と持続的な発展というきわめて今日的なかけ声が東南アジア諸国で高まっているとはいえ、森林の周縁部での農地の拡大、濱海部での養魚池の拡大などはこれからも進んでいくであろう〔田中 n.d.〕。このようなフロンティアとも言える新たに開かれた農業空間と、すでに生態的にも社会的にも安定した地域となっている農業空間をひとまとめにして、すべてが海域世界に含まれるとするのはいささか厳密性に欠けるとの指摘を受けるに違いない。しかし、海域世界の社会特性が、前田の言うように、離散移住、商品化、ネットワーク性という点に集約できるとするならば、こうしたさまざまな形態と特徴をもつ農業空間を、一括して海域世界に含めることも可能ではないかと思われる。そして、前田の「海域世界モデル」を適用することによって、これまでとは違った農村や農民のイメージを描けるのではないかという期待も、この考えのなかに込められている。

以下、前田が提唱した海域世界のモデルを枠組みとして東南アジア島嶼部の農業、農村、農民を再考することにしたい。とくに前田の言う、「森と水のフロンティアに生活空間を広げていった」「離散移住」する人たちとして農民をとらえ、彼らの社会がもつ商品化、ネットワーク性という特性に関心を集中させながら、南スラウェシ州の農民移住の事例を紹介することにする。

Ⅱ 南スラウェシ州への農民移住

1. 移住の過程

南スラウェシ州への大規模な農民移住が始まったのは、オランダ植民地政府によるコロニザシ (Kolonisasi) 政策によってルウ (Luwu) 地方のマサンバ (Masamba) やウォトゥ (Wotu), さらにマンダール (Mandar) 地方のポレワリ (Polewali) などに入植地が開かれた1930年代後半である。入植者はジャワおよびバリからの移住者であった。こうした政府主導の農民移住は大戦中および独立後の混乱のなかで一時途絶えていたが、1970年代後半から再び活発になった。かつてのコロニザシ政策の時代と同じく、ルウやマンダール地方にトランスミグラシ (Transmigrasi) 政策によるたくさん入植地が開かれるようになった。

ここでとりあげる南スラウェシ州への農民移住は、こうしたトランスミグラシの入植地がもっとも多く集中したルウ県、なかでもウォトゥ郡およびマリリ (Malili) 郡の事例である。ルウ地方は南スラウェシ州ではもっとも開発が遅れた地域の一つであったが、70年代に入ってから地域開発事業が集中的に投入されるようになった。ルウ・プロジェクトと呼ばれる開発計画によって灌漑水路の設置や道路整備が急速に進むとともに、トランスミグラシによる入植地の開設も地域開発の一環として進められた。現在もこうした開発計画が進行中である。

ルウ県は、地方統計 (1990年) によると、全面積約178万ヘクタールのうち森林面積が約132万ヘクタール (75%), そのうち12万ヘクタールあまりが他用途への転換が可能な森林 (hutan konversi) となっている [Kantor Statistik 1991] ように、政府関連事業による移住入植地の開設やプランテーションの開園のような大規模開発の可能な土地をまだ残しているところである。このような転換林として線引きされた土地のほかに、用途が定まらずに残されたブッシュや二次林で被われた未利用地が相当広く残っている。ここにも政府の移住入植地が開かれるが、それ以外に、自発的移住者と呼ばれる人たちが自力で開墾して入植するのも、おもにこういう状態で残された地域である。

ウォトゥ郡には1970年代半ばから政府の入植地への移住が始まり、マリリ郡へは80年代から移住が始まった。同じ頃、政府の移住政策が始まる前後から、自発的な移住者の流入が始まっている。彼らの流入は政府のさまざまな開発計画と歩調を合わせるかのように進行しており、実数はつかめないものの相当な数にのぼっている。表1は、両郡の1975年以来の人口推移を郡役所の集計にもとづいて整理したものであるが、集計に現われない自発的な移住者の数を考慮すると、相当な数の流入があるものと推定できる。¹⁾

以下では、1970年代半ばから盛んになるウォトゥ郡に入植した自発的移住者、および80年代から盛んになるマリリ郡への自発的移住者の入植までの経過をみることにしたい。ウォトゥ郡からはレウォヌ村 (Desa Lewonu) のマナンガル (Manangalu), マリリ郡からはタンピンナ

田中：東南アジア海域世界と農業フロンティアの拡大

表1 ウォトゥ郡およびマリリ郡の人口変化（1975－1988）

年	ウォトゥ郡			マリリ郡		
	(A)	(B)	(C)	(A)	(B)	(C)
1975	18,734	15,935	2,799	10,946	10,946	—
1976	18,933	15,623	3,310	14,397	14,397	—
1977	19,838	15,784	4,054	14,105	14,105	—
1978	22,031	16,949	5,082	11,457	11,457	—
1979	22,706	—	—	12,083	12,083	—
1980	26,672	18,227	8,445	15,134	12,881	2,253
1981	26,391	—	—	20,457	12,987	7,470
1982	28,567	21,151	7,416	24,976	13,525	11,451
1983	29,844	21,955	7,889	25,443	13,787	11,656
1984	31,675	27,634*	4,041	26,288	14,219	12,069
1985	31,192	27,057	4,135	27,148	14,992	12,156
1986	32,573	27,602	4,971	27,539	15,189	12,350
1987	32,582	27,554	5,028	28,106	15,442	12,664
1988	32,557	27,538	5,019	27,754	15,503	12,251

出所：両郡役所による。

(A)：郡の全登録人口

(B)：政府入植地人口を除いた人口

(C)：政府入植地人口。なお、1984年以降のウォトゥ郡のC欄の人口は、政府入植地が通常の行政村として独立したものも含む。

* 政府入植地人口の一部が在来の行政村に組み込まれたために生じた変化。

村（Desa Tampinna）のウジュンバトゥ（Ujung Batu）およびマリウォウォ（Maliwowo）に入植した人たちの事例をとりあげる。

マナンガルは、県都パロポ（Palopo）とウォトゥを結ぶ幹線道路に沿って、ウォトゥから西約6キロメートルに位置している。かつてこの集落はさらに北方、上流のマナンガルフルと呼ばれる土地にあったが、オランダ時代の平野部への再移住政策によって現在地に移ることになった。もともとの住人はウォトゥから中部スラウェシにかけて分布するバモナ人であったが、1970年代半ばからボネ（Bone）、ソッペン（Soppeng）などの南スラウェシ州内部からブギス人移住者が、そして島外からはジャワ人が流入して急速に人口が増大した。村役場の集計では同集落の1980年人口は339人、1990年には544人²⁾で、両年とも在来のバモナ人よりも入植者の

1) 自発的移住者が移住地に定着してもすぐに村役場へ報告するわけではない。また、村長がその定着を知っていても、村役場の登録人口が修正されとは限らない。実際に筆者が後述のマナンガル集落で全戸調査をした1984年と88年の人口を比較すると、村役場の登録人口はそれぞれ556人と544人であったのに対して、全戸調査の人口は536人と674人となった。88年には実に100人以上の開きがあったことになる。

2) 1990年の登録人口は、1988年と同じ数字である。

人口の方が多く、この10年間の増加人口のほとんども外部からの入植者となっている。

1970年代半ばから80年代半ばまでは、外部からの入植者は郡長の許可を得て未利用地の開墾権を得ることができた。初期の人たちはこの開墾許可を得て入植している人、あるいはまず開墾に入って定着してから開墾許可の承認を得る人などさまざまであったが、入植者が入り込む直接のきっかけは伐採会社の道路開設であった。ブギス人の最初の入植者は、この伐採会社の伐採人あるいは道路建設の労働者として出稼ぎに来ていたボネおよびソッペンの出身者、そしてこの地方にブギス・タバコ之行商に来ていたソッペン出身者などである。彼らが幹線道路から延びる伐採道路に沿って土地の分配を受け、自力で森林の開墾に着手したのは1976年のことである。初期の入植者たちは、その後、盛んに郷里の親戚・知人に入植を勧め、その結果、ブギス人がこの入植地の最大グループを形成するに至っている。

もう一つの移住者のグループは東ジャワ州のバニェワンギ県出身のジャワ人である。彼らの移住の先駆けとなったのは同県出身の退役軍人で、彼は50年代にウォトゥへ従軍中にマナンガルのバモナ人と結婚し、退役後1972年に妻の郷里へ移ってきた。ちょうどブギス人入植者が入り始めた時期に彼自身も土地の分配を受けて伐採道路沿いに移り住み、その後、同郷の知人に移住を勧めた。その勧誘に従ってバニェワンギから最初に移住者が入植したのは1977年のことである。こうしてジャワ人のグループが入植すると、バニェワンギからの後続者だけでなく、ジャワから来ていた近隣の自発的な移住者たちも伐採道路沿いに土地を求めて移り住むようになった。こうして移住者の第二のグループが形成されていった。

マリリ郡タンピンナ村への自発的な移住者の入植までの経過もマナンガルの場合とよく似ている。タンピンナ村のウジュンバトゥとマリウォウォは、ウォトゥとマリリを結ぶ幹線道路のちょうど中間あたり、郡都マリリから西北へ約15から20キロメートル、カラエナ（Kalaena）川とオンコナ（Angkona）川のあいだに広がる一帯である。この地域には、1970年代までは幹線道路の両側に森林が広がり、ごく一部に地元のブギス人、一般にブギス・ルウと呼ばれる人たちが入植していたにすぎなかった。幹線道路も70年代初めはまだ細い小径にすぎず、それが拡張されたのが70年代末で、80年代に入るとカラエナ川やオンコナ川の架橋と道路舗装が完成した。こうした交通基盤の改良がこの時期以降の急速な移住者の流入をうながす誘因となった。

いち早くこの一帯に入植してきたのは、南スラウェシ州内のワジョ、ソッペン、ボネ県出身のブギス人とルウ県の隣県タナトラジャ県出身のトラジャ人である。ブギス人入植者の大部分は、木材の伐採やマリリ東方のニッケル鉱山の労働者としてマリリ郡やルウ県の他郡に来ていたり、行商のためにこの地域を頻繁に往来していた人たちである。また、トラジャ人移住者も、在来のパモナ人集落の知人を頼ってすでにこの地域に移住していたという人たちで、初期の入植者はすべて何らかのかたちでこの地域と関係をもつ人たちであった。

70年代末までの初期の移住者にやや遅れて、二つの大きなグループが1981年に移ってきた。

一つはピンラン県からこの地域の汽水性湿地で魚やエビの養殖をするために移ってきたブギス人、もう一つはルウ県南部のパダンサッパ（Padangsappa）村から移ってきたトラジャ人である。トラジャ人のグループの場合は、出身地のタナトラジャ県からパダンサッパ村のトラジャ人入植地トゥマレ（Tumale）集落にまず移り、そこで先に入植していた人たちの農作業を手伝いながら、彼ら自身の移住地をルウ県のなかに探していた人たちである。80年代半ばになってもまだ開墾の余地を残していたこの地域には、その後もたくさんのブギス人とトラジャ人の移住者が流入しており、その流入は90年代初めに至ってもなお続いている。

表2と表3は、上記の二つの地域の入植者の世帯主を対象に、1984年に行なった移住の経路についての調査結果をまとめたものである。表には出生地と移住前の最終居住地のみがまとめられているが、この結果からだけでも、この地域への入植が彼らにとって最初の移動ではなかったという人が相当多く含まれていることが分かる。この聴取結果によると、入植者の出生地での職業はほとんど例外なく「農民」で、しかも、移住の動機は農業だけでは食べていけない、あるいは自分の土地がないために郷里を出たという人たちであった。郷里を出てからの仕事はブギス人の多くは行商や、木材伐採地、鉱山、建設現場の賃労働などで、すでに述べたように、出稼ぎでルウ地方に早くから来ていた人たちである。なかにはウジュンパンダンで大工やベチャ曳きをしていたという都市を経由した移住者もいる。また、タンピンナ村の例のようにスマ

表2 ウォトゥ郡レウォヌ村マナンガルの伐採道路沿いに入植者（世帯主）の出生地と入植前居住地

地 域	ブギス人		ジャワ人		その他		バモナ人		計	
	B	L	B	L	B	L	B	L	B	L
<u>ルウ県内</u>										
マナンガル	—	—	—	—	—	—	20	16	20	16
レウォヌ村内他集落	—	—	—	—	—	—	6	8	6	8
ウォトゥ郡内他村	2	3	—	5	—	—	3	3	5	11
ルウ県内他郡	4	14	—	—	2	2	3	4	9	20
<u>南スラウェシ州内</u>										
ソッベン県	22	16	—	—	—	—	—	—	22	16
ボネ県	12	5	—	—	—	—	—	—	12	5
ウジュンパンダン	—	5	—	—	—	1	—	—	—	6
その他	10	7	—	—	2	2	—	—	12	9
<u>南スラウェシ州外</u>										
スラウェシ島内他州	—	—	—	—	1	—	—	1	1	1
東ジャワ、バニユワンギ	—	—	15	12	—	—	—	—	15	12
その他	—	—	3	1	—	—	—	—	3	1
計	50	50	18	18	5	5	32	32	105	105

出所：Tanaka [1986a] による。

注：Bは出生地，Lはマナンガルへ移住前の最終居住地。

表3 マリリ郡タンピンナ村ウジュンバトゥとマリウォウォへの入植者(世帯主)の出生地と入植前居住地

地 域	ブギス人		トラジャ人		ブギス・ルウ人		計	
	B	L	B	L	B	L	B	L
<u>ルウ県内</u>								
マリリ郡内	—	6	—	2	17	21	17	29
ルウ県内他郡	5	10	2	46	8	4	15	60
<u>南スラウェシ州内</u>								
ワジョ県	9	3	—	—	—	—	9	3
ソッベン県	3	1	—	—	—	—	3	1
ボネ県	5	2	—	—	—	—	5	2
ピンラン県	9	22	—	—	—	—	9	22
パンケップ県	8	—	—	—	—	—	8	—
タナトラジャ県	—	—	59	11	—	—	59	11
その他	9	2	—	—	—	—	9	2
<u>南スラウェシ州外</u>								
スマトラ	—	2	—	—	—	—	—	2
カリマンタン	—	—	—	2	—	—	—	2
不明	1	1	—	—	—	—	1	1
計	49	49	61	61	25	25	135	135

出所：Tanaka [1986a] による。

注：Bは出生地，Lはタンピンナ村へ移住前の最終居住地。

トラから移住したという人が少数いるが、これはジャンピ州やリアウ州のブギス人の親戚をたよって出稼ぎに行っていたという人たちである。ブギス人のなかにはルウ地方へ入植するまでに5回、6回と居住地を変え、そのたびに仕事も変えてきたという事例も少なくない。

ジャワ人の場合、郷里では農地がなかったために、移住先で自分の農地を手に入れようというのが移住の動機であった。マナンガル集落へのジャワ人移住者は、そもそも退役軍人の誘いによって集まったという背景があるため、バニウワンギから直接移住し、しかもそれが初めての移動であったという人たちが大半を占める。しかし、少数ながら、すでに先住のジャワ人を頼ってルウ地方に移住し、あらためてマナンガルに入植した人たちもいる。ルウ地方には戦前のコロニザンによって開かれたジャワ人の集落、そして近年のトランスミグラシのジャワ人入植地があり、バニウワンギから直接移り住んだジャワ人以外の入植者のすべてはこうした移住政策でできたジャワ人の村を経由している。マナンガル以外でもジャワ人の自発的移住者のかなりが同様の経路を経ているようで、政府の入植地開設がその後に続く自発的なジャワ人の移住をうながしているようである。こうした経路をとる人たちの多くは、先に移住したジャワ人やブギス人のもつ農地の小作人あるいは農業労働者としてしばらく逗留し、機会をみつけて自力で土地を開墾して入植するが、その後も以前の逗留先との関係を維持していくことが多い。

トラジャ人の場合、移住の頻度は比較的少なく、その移住のパターンはジャワ人の場合によく似ている。移住の動機は、同じく自分の保有する農地を得るためである。出身地のタナトラジャ県はルウ県に隣接するため、たくさんのトラジャ人移住者の集落がルウ県内に古くから存在する。とくに県南部のパダンサッパ、あるいは県都パロポからマサンバに至る平野部に多く、こうした村々を中継地にしてさらに移動するのがトラジャ人入植者の一般的な移動の経路である。

以上のような入植までの移動の頻度や経路をみると、そこには民族性とも言えるような違いも認められる。しかし、どの場合も、あてどなく彷徨した挙げ句にウォトゥヤマリリに入植したというのではなく、それなりの計画をもって、人と情報の網の目に頼りながら入植しているのが特徴である。こうして入植してきた移住者がどんなふうに関墾し、定着していくのか、その過程を次にみてみよう。

2. 開墾と定着

移住者が入植する土地は、大部分が未利用のまま放置された二次林やブッシュであるが、なかには相当長期間使用されていなかった森林も入植地となっている。こうした未利用地は元来が国有地であるが、前述したように、郡長の許可を経て開墾を目的とした個人または法人に無償で貸与できた。この開墾許可には、3年間の有効期間、1カ月以内の標柱による開墾権明示の義務、3年以内の耕地造成の義務など、いくつかの条件が付けられているが、いったん開墾すると、この開墾権は所有権とほぼ同様な効力をもつようになる。耕地を開き、作物を栽培していれば3年間の貸与期間がすぎても、その権利は用益権として入植者に引き継がれていくからである。

こうして開墾に着手した入植者は、森や林を拓いたあと、作物の栽培を開始する。開墾当初の耕地は焼畑と同じような状態である。ここに、当座の食用としてのトウモロコシやイネを焼畑の播種作業と同じような方法で播く。そして開いた耕地の条件に応じてさまざまな利用が始まっていく。低地であれば水田に、水がかからない高みの土地であれば畑にしていくが、その利用の仕方はさまざまである。マナンガルのブギス人は、その畑にいち早く商品作物を植え始めた。初期の入植者は、当時ブームになっていたチョウジを植えたが、それが病気などで失敗した後はカカオを植えて園地を広げていった。その後のブギス人入植者も彼らに続いてカカオを主体に園地を造成し、ブギス人の入植地はいまでは広々としたカカオ園となっている。この他に、コショウ園を造成したりする者もいて、一般に、ブギス人入植者は商品性の高い作物を栽培するのが特徴となっている。そして、こうした特徴はタンピンナ村に入植したブギス人にも共通していた。

ジャワ人やトラジャ人は、ブギス人に比べて自給用作物の栽培への関心がやや高く、なか

でも水田や普通畑の造成により強く傾斜した開墾・定着の過程を歩んでいった。ジャワ人は、畑でのトゥガラシ、ナスビなどの野菜類やラッカセイ、リュクトウなどのマメ類の栽培にも力を向け、これを販売用とするほか、近隣の農地の小作や賃労働に出かけることが多い。一方、トラジャ人は、開墾地の水田化にもっとも強く執着するが、その他には斜面を利用したバナナ栽培を盛んに行い、それがもっとも主要な販売用作物となっている。

3. 定着後の変化

開墾後の農業活動には以上のような民族間差が顕著に見られたが、定着が進むにつれて、入植者の生業には変化が現われるようになってくる。それは農業生産における商品作物栽培への収斂化と、農業生産以外の生業における分極化である。

収斂化は、ブギス人が始めたカカオ栽培が他の民族集団にも浸透することによって起こっていった。カカオの栽培がうまくいき始めると、次第にジャワ人やトラジャ人、そして在来のパモナ人やブギス・ルウ人もそれに追随してカカオを植えるようになり、カカオが入植地全体のもっとも主要な農業生産物となっていった。こうして、現在では、入植地全体が商品作物栽培に大きく傾斜した農業空間を形成するに至っている。

一方、農業以外の生業における分極化は、民族間差をさらに顕著にするような方向に進んでいる。以下は、各民族をいかにもステレオタイプ化して見たような表現になっているが、現実にはそうした方向への変化が顕著に現われてきている。

ブギス人入植者にはもともと郷里と入植地域とのあいだを行商していた人々がいたが、彼らは今もその商いを続けている。扱う商品はブギス・タバコ、薬などで、今はウォトゥやボネボネなど大きな町の定期市でおもに販売している。また、オートバイを購入して、ウォトゥの港に入る鮮魚や干し魚を振り売りする者も出てくるようになる。規模は小さいけれども、農業以外の収入を商いに求める人が多いのがブギス人入植者の特徴である。さらにそれが本格化してくると、カカオやコショウなどの入植地の産物を仲買する者も出てくるようになる。集荷するための資金はパロボやウジュンパンダンの商人から出ており、一定量がまとまるとその商人へ直接出荷し、その差益を手に行している。彼らは、カカオやコショウの集荷だけでなく、パモナ人が昔から森でつくっていたヤシ砂糖の集荷なども扱うようになり、さらに肥料や苗木などの販売も手がけるようになっていく。もはや開墾した農地での耕作に自ら汗を流すことはなく、他の入植者からは成功者とみなされるようになった人たちである。こうした成功者のなかからは、軽自動車を購入し、パロボとウォトゥを結ぶ乗客運送業を始める者まで現われるようになっていく。ブギス人の入植者のすべてがこうした商業活動を行っているわけではもちろんないが、物流にかかわる部門に余業をもつ人はかならずブギス人であると言ってよいほど、商業活動への指向の強いのがブギス人入植者の特徴と言えよう。

ジャワ人も入植地での農作業に従事するだけではない。彼らが定着後に始めるもっとも一般的な現金収入の途は、農業出稼ぎである。近隣の農地の小作、賃労働から始まり、次第に遠方へと出稼ぎの範囲を広げる傾向にある。なかには、東南スラウェシ州のブギス人がもつ私営のプランテーションへ季節的に出かけ、入植地と出稼ぎ先を定期的に往還する者も出ている。一方、小さな作業場を作って、木工や瓦作りなどを個人で小規模に始めるのもジャワ人入植者の特徴である。マナンガルでは入植者の第二世代がこうした農業以外の小規模な事業を始めつつある。

ジャワ人入植者のもう一つの顕著な傾向は、女性が農産物の加工・販売に積極的に進出していることである。とくに、この地域でこれまであまり流通していなかったササゲ、トマト、ナスビ、葉菜類が定期市に出回り始めるようになったのはジャワ人入植者がそれを盛んに栽培するようになったからである。そして、その販売を担当するのが女性である。また、ダイズの加工食品テンペも、ジャワ人入植者の増加とともに一般化してきた。それが定期市に出回り始めたころは、ブギス人女性が子供のおやつに買って帰る程度であったが、今では食事のメニューとしてブギス人入植者のなかに登場するほどになっている。このテンペの加工・販売もジャワ人女性による重要な現金収入源である。マナンガルでは、現在、3軒のジャワ人世帯がテンペを製造しており、原料のダイズをすべて外部から購入しての生産である。毎日、自家製造のテンペを自転車で振り売りに出る人もいて、ジャワ人女性はブギスやトラジャの入植者にくらべて小商いにとくに熱心なようである。

ブギス人やジャワ人にくらべて、農業以外の活動の低調なのがトラジャ人入植者である。彼らは、低地の水田化と斜面の園地化にもっとも力を注ぐが、園地で生産されたバナナやカカオをブギス人の仲買人に販売するだけで、それを直接自分たちで商いしようとはしない。常時なんらかの商業活動に携わるという人はまったくなく、農業以外には木工や大工仕事を余業にする人が数人いるくらいである。ブギス人の伐り出した丸太を水牛に曳かせて搬出したり、ブギス人の養魚池造成の土手を造ったりする臨時の賃労働に出かける以外には、もっぱら農業に力を注ぐのがトラジャ人移住者の入植後の特徴といえよう。もう一つの特徴は、子弟の転出がブギス人やジャワ人よりも相対的に多いことである。その転出先はほとんどがウジュンパンダンで、親戚・知人を頼っての就業、就学であったり、出稼ぎであったりする。ブギス人子弟の場合には多くが両親とともに入植地での農業や商業活動に従事しているのと好対照をなしている。

以上のような収斂化と分極化を見せながら、入植地は開墾当時の開拓地特有の雰囲気急速に失っていく。森林が伐り払われた開墾地は見るからに殺風景で荒々しい景観であったが、徐々に作物の緑に被われて、10年も経つと昔からあった集落とほとんど変わらないような景観になってしまう。また、移住者が盛んに入植していたころは人の往来が頻繁だったが、それも次

第に鎮まって、見知らぬ人が出入りするものも稀になってくる。ところが、こうした目に見える安定化の一方で、土地を巡るさまざまなやりとりが活発になってくる。入植者と先住者のあいだ、あるいは入植者同士のあいだの土地の売買や貸借が盛んになるのが定着後のもう一つの大きな変化である。³⁾ それにともなって入植者の再移住や新たな移住者の流入も起こるようになる。

4. 再移住と新たな移住者の流入

もちろんのことではあるが、入植した人たちがすべてが所期の目標を達成しているわけではない。自力で開墾した農地をやがて手放す入植者もいれば、在来のパモナ人の土地や入植者の開墾地を購入して農地を徐々に増やしていく入植者もいる。そして、農地を手放した入植者のなかには、開墾のために再びよそへ移っていく者もあれば、もっと積極的に、開墾地を売り払った資金をもとでさらに別のところへ移住していく者もいる。

すでに述べたように、入植者は国有地の開墾権を手にはしているだけで、その土地に対する所有権はまだもっていない。正式な所有権は土地登記を経なければならないが、すでにその開墾権が用益権として、そしてさらに所有権として一般には認知されている。したがって、開墾された土地、そしてさらに作物が植えられた土地は、その投下労働と土地の価値に応じて売買されるのが一般化している。

開墾地を売り払った人のなかには、そのまま移住地に居残る人と他へ移る人がある。居残った人は、パモナ人や同じ入植者が所有する未利用地や農地を耕作させてもらったり、地元の業者の小規模な木材伐採や製材などの賃稼ぎをして、一時をしのいでいく。彼らは、他人の耕地の刈り分け小作、農地管理の賃労働のほかに、カカオ園造成を請け負ってそれができあがったときにその土地の一部を開墾・造成の対価として分割してもらうというような、さまざまな条件のもとで他人の土地での耕作を続けていくことが多い。一方、他へ移る人たちもその方向はさまざまである。開墾地の管理を他人に任せて郷里へ戻る人もあれば、開墾地を売り払って次の開墾地へ移りさらに広い土地を入手しようとする人もいる。また、もともと行商をしていた人は、開墾地を売ってウォトゥなどの小さな町に移り住んで商店を開く人もいる。このように、居残る人も、再び移っていく人もほとんどが開墾地を媒介にしているのが特徴である。以上のような例はとくにブギス人の入植者の場合に顕著である。

ジャワ人の場合は、比較的开墾地に定住する例が多いと言われている。マナンガルの場合もそうである。しかし、彼らの場合もいったん移住するとなればそう躊躇しないようである。マナンガルではこういう例があった。前掲の表2では1984年の段階で18世帯が定着していたが、

3) 移住者と先住者および移住者間の土地の売買と貸借などについては、田中〔1990〕に概要が紹介されている。

実は、それ以前には30世帯あまりが入植していたという。大部分がパニェワンギからの移住者であったが、マナンガルで分配された入植地の面積が十分でなかったために、そこでは満足できず次々と他の土地へ出ていった経緯があったという。彼らは、マナンガルの開墾地を居残ったジャワ人入植者に託したり、あるいは売り渡したりして、東南スラウェシ州のトランスミグラシの入植地を中継点にして、1980年前後に再移住したという。現在マナンガルに定住しているジャワ人入植者が東南スラウェシへ定期的な農業出稼ぎに出る背景には、同じジャワ人入植者の先行する再移住があったのである。

このような家族をあげての再移住のほかに、家族成員の一部が移住するという例もたくさんある。近隣の新しい開墾地への長男や次男の移住、子供の出稼ぎ先での定住という例がもっとも多い。もう一つは、ジャワ人によく見られる例であるが、子弟を郷里へ帰して教育を受けさせる例もある。中学生くらいから入植者の親元へ送る例が少なからず見られる。出身地との往来は、ジャワ人に限らず、ブギス人やトラジャ人にも共通しており、同じ南スラウェシ州に郷里のあるブギス人やトラジャ人の場合は親戚、知人の往来はかなり頻繁に行なわれているようである。

このような入植地と郷里との往来は、入植者のほとんどが定着して土地に余裕がなくなったにもかかわらず、新しい移住者をさらに招く一因となっている。すでに新たな開墾の余地を残していないマナンガルのようなところでは、開墾による入植はなくなり、購入した土地に移り住むという新しいタイプの移住が始まっている。1980年代半ば以降のマナンガルの人口増加の大半は、こうした土地の売買を通じて移ってきた人たちの流入によっている。多くの場合、パモナ人がもつ未利用地や耕地を買って移り住むが、なかには先に入植していたブギス人やジャワ人の開墾地を購入するという場合も見られる。新規の移住者のすべてはブギス人で、先住の入植者と知己であったり血縁であったりする人が多い。そして、そのほとんどが移住前よりももっと広いところでカカオ栽培をしようという計画をもって移ってきた人たちである。

以上のような土地の売買を伴う人々の移住が、すでに安定したかに見える入植地のなかで始まっている。土地そのものは、かつては入植者がそれを手に入れようとする対象物であったが、開墾・定着後には彼らにとってさらに新たな移住を可能にする手段としての性格ももつようになっていく。移住後すでに10数年を経ると、開墾地はすでに人手の入った耕作地として価値が高まっている。入植者にとっても、そして入植地の外部にいる人にとっても、そこで生産される作物だけでなく、土地そのものもまた商品としての価値を高めているようである。

Ⅲ 海域世界としての農業空間

以上、南スラウェシの入植地、すなわち新たに開かれた農業空間の10数年にわたる変貌を簡

単に紹介した。この10数年のあいだに、当初の開拓空間は景観としてはいわゆる農村らしくなっていて、安定した農業空間へと変貌していったかに見える。しかし、こうした外見上の変化にもかかわらず、人々が離散移住を繰り返し、現金収入を求めてあらゆる機会をとらえて商品化できるものを探求し、さらにこのような人と物の流れを円滑に運ぶために人と情報のネットワークを強く保持するという特徴をもった社会はずっと変わりなく続いているようである。海域世界のいわば「海域性」とでも総括できる離散移住、商品化、ネットワーク性という特性は、開拓前線が過ぎ去って農業空間へと変貌してからも強く保持されているように思えるのである。

海域世界という枠組みを設定して東南アジアの農業や農民の特性を再考しようとしたのは、たんにここに紹介したような南スラウェシの開拓前線の事例があったからだけではない。同じようなことが、例えばスマトラやカリマンタンなどを歩いていても感じられたからである。スマトラへ行っても、カリマンタンへ行っても、スラウェシで見聞したのとよく似た現象が随所で見られたことが、海域世界に共通する農業や農民の特性について考えるきっかけとなった。

例えば、スマトラのリアウ州東海岸の泥炭湿地では、ブギス人とジャワ人移住者がココヤシ園と水田を造成しているが、移住・定着の過程や、その後の入植地の変容は驚くほど南スラウェシの事例と一致している。そして南スラウェシで見られた民族間差と同じような違いが認められた [Tanaka 1986b]。ブギス人が見せる商業活動への強い傾斜、ジャワ人が見せる農地への執着と移住後の広範囲にわたる農業出稼ぎなどは、南スラウェシの場合とまったく同じ行動パターンであったと言ってよい。

スマトラ東海岸の湿地林に入って伐採労働に従事する人たちの多くはジャワから直接やってきたり、いったんスマトラに移住したジャワ人の出稼ぎ者であるという。カリマンタンでも同じようなジャワ人に出会ったことがある。また、二次林の広がる荒れた風景のなかで、ランブータンが整然と植えられた開墾地が突然現われたとき、ああ、これはジャワ人の仕事に違いないと直感したことがある。案の定、ジャワ人の移住者が入植しており、聞くところでは、その家族はいったんアブラヤシ・プランテーションの労働者として同じ西カリマンタン州の別の地域に移住したが、現在は、ムラユー人の持つ土地をまかされて園地を開き、野菜や淡水魚養魚池、水田などを組み合わせた複合的利用の農地を管理しながら、そこに定住しているという。また、トランスミグラシの入植地に移住し、そこでの畑の植え付け作業が終わったので、遠く離れた金採掘場まで出かけ、砂金を採るために長期間滞在しているジャワ人移住者にも出会ったことがある。「機に応じて森と水のフロンティアに生活空間を広げる」人たちの典型的な例がこうしたジャワ人移住者のなかにもうかがえるのである。

海域世界のいわば主人公格とも言えるブギス人が移動と定着を繰り返して生活空間を広げてきたということは、比較的分かりやすいことである。南スラウェシのブギス人やマカッサル人、南カリマンタンのバンジャール人、マドゥラ島のマドゥラ人、漂海民のバジョウ人などは以前

から頻繁に移動する民族としてよく知られている。しかし、熱帯アジアでもっとも集約的な農業を確立した、言わば農業空間の申し子とも言えるジャワの人たちも、このような「海域性」を多分にもった人たちであるということをここでは強調しておきたい。一説では、毎年ジャワ人が10万人という単位でスマトラのランボン州へ移動しており、なかには季節的な出稼ぎで来てジャワに戻る者もいるが、その多くはそこに定住しているという [Uhlig 1988]。ランボン州はコロニザシ政策の入植地がいち早く開かれたところで、トランスミグラシの時代になってもたくさん入植地が開かれている。こういういわば官製の入植地のあいだを埋めるようにジャワ人が移動している姿は、スマトラの各地だけでなく、今ではインドネシアの全域に及ぶと言っていいほどである。南スラウェシの事例もこうしたインドネシア全体で起こっているジャワ人の大きな移動・定住の動きのひとつと言えよう。

たとえジャワのような安定した農業空間であっても、人の離散移住という面では古くからの海域性をまだ強く残していると考えたほうがいいかもしれない。現在、人口稠密で、集約農業が発展しているジャワが、そういう状態に達したのはつい19世紀末から20世紀にかけてである。しかも、戦後1948-50年には植民地時代のプランテーション用地や森林の小農民への分配が行なわれ、一時的に自発的移住者による開拓前線ができる状態がジャワでも起こっていた [Fryer 1970]。ことは、人口稠密な、海域世界とはもっとも縁のないような島であっても、開拓地へ向かう離散移住という現象がごく近年まであったことを示している。しかも、比較的高標高地にあった分配地では、長距離輸送による高原野菜栽培というきわめて商品化された農業ができあがっているのである。こうした点もジャワがもつ海域性の一つのあらわれではないかと思われるのである。

最後に、海域世界の農業空間ということに関連するもう一つの論点をあげておきたい。それは、農業形態の問題、あるいは人口と資源との関係から生じる農業集約化の問題である。資源の制約と人口の増加のどちらの要因が農業の集約化に強く働いたかという議論はさておいても、完成された農業空間、あるいは安定した農業空間は一般に人口支持力が高く、集約農業が発展したところとみなされている。では、ここで例にあげたような南スラウェシ州の農業開拓が進行中の地域、あるいはスマトラやカリマンタンも含めた外島地域の、新たに開墾された農業空間は、人口の増大とともにかつてのジャワが歩んだような農業集約化への途を同じように歩いていくのであろうか。このことについて、外島においては、これ以上の耕地の外延的拡大をやめて、すでに開墾された耕地の集約化をはかり、急速に増加する人口、とくに潜在的な余剰労働力を吸収することが緊急の課題であるという意見がある [Booth 1991]。これ以上の耕地の拡大よりも、ジャワに見られたような農業集約化への途を提唱する意見と言えよう。

一方、これまで見てきたような海域性という特性からこの問題を見直してみると、農業の集約化だけでなく、移住者自身がもつ商品化指向の傾向や移動性、投機性などの特性を活かした

発展方向が展望できないものかと考えられるのである。農業以外のセクターにおける就業機会増大の必要性は Booth [ibid.] も主張しているが、海域世界の農業空間がもつフロンティア的な資源利用の多様性を活かすような方向が考えられないかと思うのである。すでに森林産物の栽培化が試みられようとしているし、プランテーション作物を組み込んだ移住地の農業改善も試みられている。また、入植地を既存の町や村などの物流センターとリンクさせることも必要であろう。この地域の人たちがもともと持っていた海域性という特性を助長すれば、こうした多様な試みを盛り込んだもっと融通無碍な発展方向を展望することができるのではなかろうか。農業部門内部だけでの解決はもともと無理だという、ある種の開き直った感覚が、東南アジア島嶼部農業の将来を考えるのに必要とされるのではなかろうか。

お わ り に

以上、海域世界と農業という、一見したところ関連のない問題について、南スラウェシ州の自発的移住者による開拓地の変貌の過程をおもな事例としてとりあげながら論じてみた。「海域世界」を東南アジア島嶼部の農業を考える枠組みとして設定してみると、農業や農民を見る眼がいささか変わってくるのではないかという期待を今ももってはいるが、それが十分にここで論議されたとは思っていない。開拓前線だからこそ、そういう特性が現われるのだという反論がきっと出てくるに違いない。また、ジャワ人の移動にしても、その基盤にはそれを支える政策的な支援があるからこそ、これほど盛んになっているのであって、海域性というような特性はジャワ人のなかにあるはずがないという反論も出てこよう。しかし、あの「ジャワ農村」からでさえも、ここで紹介したような「機に応じて森と水のフロンティアに向けて生活空間を広げ」る人たちが大量に出ていることの意味を、これからも考えていきたいと思っている。人間と資源・環境を巡る問題は、東南アジア島嶼部だけの問題ではなく、今や全地球的な規模の議論となっている [Lim and Valencia 1991]。こんな時代であればこそ、「機に応じた」資源利用と、自在で融通無碍な社会を形成してきた「海域世界の農民」に学ばなければならないことも多いのではないかと思う。この小論がそうした試みとして受け入れられるならば、望外の喜びである。

参 考 文 献

- Booth, Anne. 1991. Regional Aspects of Indonesian Agricultural Growth. In *Indonesia: Resources, Ecology, and Environment*, edited by Joan Hardjono, pp. 36-60. Singapore: Oxford University Press.
 Fryer, D. W. 1970. *Emerging Southeast Asia*. London: George Philip and Son.
 Kantor Statistik Propinsi Sulawesi Selatan. 1991. *Sulawesi Selatan Dalam Angka 1990*.

田中：東南アジア海域世界と農業フロンティアの拡大

- Lim Teck Ghee; and Valencia, Mark J., eds. 1990. *Conflict over Natural Resources in South-East Asia and the Pacific*. Tokyo: United Nations University Press.
- 前田成文. n. d. 「流動『農』民ブギス」『海人の世界』秋道智彌（編），所収予定. 東京：同文館.
- 田中耕司. n. d. 「森と野の狭間——東南アジアの熱帯雨林から」『森の思想と文明』（仮題）所収予定. 東京：講談社.
- . 1990. 「農業フロンティアと移住民——南スラウェシ州ルウ県の農民移住と定着」『フロンティアとしての東南アジア』（科学研究費補助金一般研究(A)報告書）高谷好一（編），121–136ページ所収. 京都：東南アジア研究センター.
- Tanaka, Koji. 1986a. A Note on Spontaneous Migrants and Their Settlements in Northern Kabupaten Luwu, South Sulawesi. In *Environment, Landuse and Society in Wallacea*, edited by K. Tanaka; Mattulada; and N. Maeda, pp. 71–92. Kyoto: CSEAS.
- . 1986b. Bugis and Javanese Peasants in the Coastal Lowland of the Province of Riau, Sumatra: Differences in Agricultural Adaptation. In *Environment, Agriculture and Society in the Malay World*, edited by T. Kato; Muchtar Lutfi; and N. Maeda, pp. 102–131. Kyoto: CSEAS.
- Uhlig, Harald. 1988. Spontaneous and Planned Settlement in South-East Asia. In *Agricultural Expansion and Pioneer Settlements in the Humid Tropics*, edited by W. Manshard and W. B. Morgan, pp. 7–43. Tokyo: The United Nations University.